

# リハビリテーション科学部

学校推薦型選抜(一般) 小論文

**問題** 次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

2017年に認知症になって以来、自分が認知症であることを公言してきました。長年<sup>①</sup>認知症を専門に研究してきた私でも認知症になることを、多くの人に知ってもらいたい。それが公表した理由の1つです。

長寿化が進み、「人生100年時代」といわれますが、それらが進めば、高齢になると増える認知症の方も増えていくでしょう。2025年には「認知症700万人時代」になるといわれています。

もちろん予防は必要ですが、年を取れば誰もが認知症になりえるのです。認知症の人がいることが、当たり前の社会になっています。

一方、認知症の告知を受け入れられず、絶望してしまう人は少なくありません。「認知症になったら人生が終わりだ」と思い込み、なかなか病院に行けずに症状を悪化させる。家族は家族で、身内に認知症の人が出たら老人ホームに入れることばかり考える。そんなケースが多いのではないのでしょうか。これでは本人も家族も不幸になるばかりですね。

私が認知症であることを公言したもう1つの理由は、認知症が特別な病気ではないことを伝えたいためです。認知症とは暮らしの障害です。暮らしは周囲の人との関わり方によって、いくらでも改善できます。認知症になっても、自分らしい生き方を続けることができるのです。

こうしたことを、認知症になることが不安な高齢者や、高齢者を親に持つ方々に知ってほしいと思ったのが、本書執筆の動機です。

—中略—

認知症を正しく理解するため、家族や周囲の人が認知症に対する心構えをするため、認知症の人のケアに必要な「パーソン・センタード・ケア」という考え方を介護従事者が知るため、そして、認知症の人が安心して暮らせる町・国づくりをするための一助になれば、認知症の研究者として、そして認知症当事者として、これ以上嬉しいことはありません。<sup>②</sup>「私、認知症なのですよ」と気軽に語れる世の中になった先にこそ、本当に幸せな生き方が待っているのです。

出典：長谷川和夫「認知症でも心は豊かに生きている。認知症になった認知症専門医 長谷川和夫100の言葉」。2020年中央法規出版株式会社

**問1** 下線①の認知症を専門に研究してきた私でも認知症になるという状況を、筆者はどのように捉えていると考えますか。300字以内にまとめなさい。

**問2** 下線②の部分で、筆者は何を言いたかったと思いますか。300字以内にまとめなさい。

**問3** 下線②の幸せな生き方を実現するために、具体的にどのような方法が考えられますか。あなたの考えを400字以内で述べなさい。